

週刊 武四郎

●毎月第四週は、
松浦武四郎のコレクション
についてご紹介します

第29号

2018年(平成30年)10月24日(水)
発行・松阪市

監修・松浦武四郎記念館

一畳敷の数奇な運命

明治に入ってから武四郎さんは精力的に全国を旅しました。それでもさすがに六十を過ぎたあたりから足腰の衰えを感じはじめたようです。武四郎さんは考えました。

これからは、だんだんと旅に出ることもむずかしくなるだろう……（ここから武四郎さんの凡人には及ばぬ発想になるのですが）……それならば庭に小さな小さな一畳敷の書齋を作ろう。そしてその書齋は小さくともひとつひとつ全国各所のいくつある木片を集結させて作るのだ！

武四郎さんは全国にいる友人たちに手紙を書いて珍しい古材があったら送ってくれと頼みます。いつものお得意の「くれ、くれ」作戦です。

やがて集まりも集まったり木

片、その数九十一。こうして出来上がったのが、柱の一本、梁のひとつまですべて有名な神社仏閣などの古材をモザイクのように嵌め込んだ「一畳敷」と呼ばれる書齋でした。武四郎さんは、それぞれの古材のいわれをまとめて『木片勸進』という本にまとめました。いわく……

伊勢神宮（廊下の柱）、太宰府天満宮・平等院（床脇地袋板）、

法隆寺（書棚）、渡月

橋の橋桁

（柱）など

など。

古物蒐

集家たち

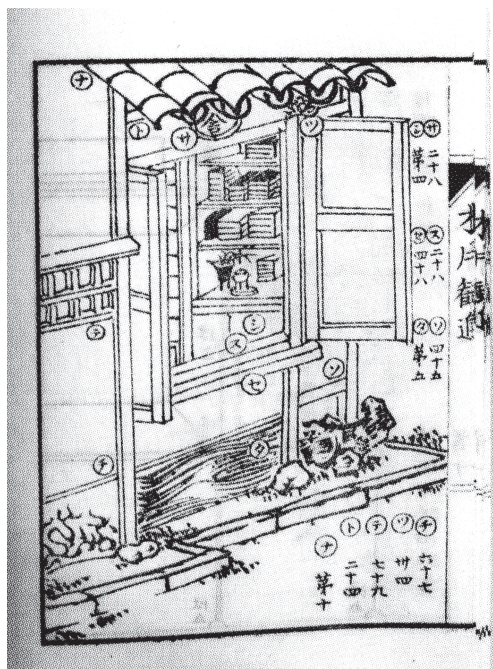
からへ好

事の絶頂と評されたこの一

畳敷ですが、武四郎さんは自分が死んだあととはこの一畳敷を棺にして茶毘に付して欲しいと言っていました。でもいざ葬儀の時にみると、「これを焼いてしまふのは惜しい」という声が上がりがり保存されることに。

そのうち紀州徳川家十五代当主（徳川頼倫）の「南葵文庫」に移築されたため関東大震災で

に移築されたため関東大震災で



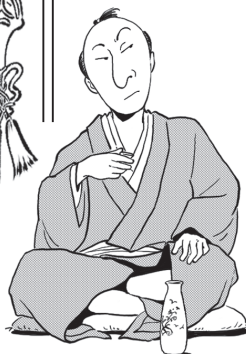
▲『木片勸進』松浦武四郎著 明治20（1887）年刊
（松浦武四郎記念館蔵）

の類焼を免れ、さらにその後、泰山荘という別荘を建てた山田敬亮という実業家に譲渡されて三鷹に移されます。そして中島飛行機を経て、その跡地が国際基督教大学の敷地になったことからこの一畳敷も一緒に大学に移管され、現在も同大学のキャンパス内にあるのです。

武四郎さんの物を集める執念が激動の時代をかくくぐって、この一畳敷を奇跡的に今日まで生き存らせたような感じがしてなりません。

松浦武四郎（1818～1888）

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地（今の北海道）を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として「北海道」のもととなる「北加伊道」を含む6案を政府に提案したことから「北海道の名付け親」と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』（河治和香著）が、小学館より好評発売中！